

短編 7



*story by aono*

*photo by hiros*

新宿副都心にある高層ホテル、パークハイアット着いたのは、森恭介との約束の時間よりほぼ三十分ほど前だった。四十一階にあるピークラウンジへとエレベーターで昇る。日曜のせい、ラウンジはほぼ満席だ。

運よく席があいて、神崎淑子はすんなりと座ることができた。来ていたモスグリーンのカシミアのコートを脱ぐ。今日は白のセーターとスカートの清楚に見える服装を選んでいる。

案内された席に長い足を組んで座り、窓の外を眺めた。三月の声を聞いたというのに、東京の空には朝から粉雪がちらつき、とうとう午後にはホテルの窓から見える眼下の景色は白一色となっていた。

—窓際の席が取れたのはラッキーだったわ。

淑子と入れ違いにラウンジを出て行った若いカップルに密かに感謝した。

ボーイにエスプレッソを注文し終わると、深く息をつき、ゆったりとしたソファの背にもたれた。

—約束までまだ時間がある。少し落ち着かなければ。

心を鎮めようと、全面ガラス窓の外を眺める。雪は静かに舞っていた。

顔は窓に向いていても、淑子は神経を入り口に集中させている。ボーイがコーヒーを運んできても、半分上の空だ。無意識に腕時計を何度も見た。

時間通りに恭介が現れたのを眼の隅で確認する。自分のほうに近づいてくるのを全身で感じながら、淑子は雪に気をとられている振りをしていた。

「やあ、待たせたかな？」

バリトンの落ち着いた声が耳に届いた。

少し驚いたような顔を作って、淑子は振り返った。

「神崎君が僕を呼び出すなんて、どういう風の吹きまわしかね？」

恭介は向かいの席に座りながら、皮肉っぽく尋ねた。それには答えず、淑子は自分の前に置かれているデミタスカップに目を移し、指で縁をなぞった。

「先生、何を召し上がる？」

「君は相変わらず砂糖を入れないエスプレッソか。僕は普通のコーヒーにしよう」

「アルコールになさらないんですか？」

「まだ、昼間だよ。それにこの後、用事もある」

恭介は手をあげてボーイを呼んだ。

「レギュラーコーヒーを」

何気ないそんな動作がスマートに見えた時もあった。

「それで、話とはなんだね？」

「先生、病院をおやめになるんですって？」

ことさら低い声で淑子は聞いた。

「相変わらず地獄耳だね」

「病院長に伺ったんです。三月一杯だって」

「院長が君にそう伝えたらならそうでしょう。何故僕にわざわざ確かめる必要があるのかな。あちらは経営者、僕は副院長といっても雇われ医者」

「何が何でも辞めますと仰ったと聞きました」

「ベッドの中でかね？」

「看護部長としてです」

淑子は顔を紅潮させ、強い口調で訂正した。ここで怒っては元も子もない。

「それは失礼。例えそうであったとしても、君には何の関係もない」

「冷たいんですね」

恭介は片眉を上げると、運ばれてきたコーヒーを一口飲んだ。

雪はだんだんと激しくなり、ガラス窓に吹き付ける様はまるで吹雪のようだ。恭介はその様子をじっと見つめていた。

「奥様を……」思い出していらっしゃるんですかと聞こうとして、淑子は言葉を飲み込んだ。

恭介は気にする風でもなく答える。

「ああ、もう三年になる。あれが逝ったのはこんな吹雪の日だった」

淑子も覚えていた。頭が割れるように痛いとき、恭介の妻が病院へ電話してきたのを受けたのは淑子だった。だが、会議中だった恭介が自宅へ戻った時、すでに意識不明だったと言う。蜘蛛膜下出血だった。

葬儀には病院の事務職が借り出されて会葬者が足を取られないように雪かきをしていた。

何人かはスコップを持ち、泥だらけになって、まるで道路工事をしているようだったわ。

仲が良いので有名な夫婦だった。若い頃アメリカに留学していたと聞いている。妻の写真を医局の机の上に飾っていた。ほかの医者が冷やかしても照れもせずに「君は奥さんの写真をなぜ飾らないんだ？」と不思議そうに答える。

子供に恵まれなかったから、夫婦の絆がより一層強くなっているのだろうと、淑子は解釈していた。そんな恭介でも、自分に少なからぬ関心を持っていたはずと、淑子は自信を持っていた。

窓の外を眺めている恭介の横顔をそっと見る。鬢のあたりに、かなり白いものが見える。確か五十歳になっているはずだ。

「光陰矢のごとしとはよく言ったものですね」

「そうだよ、君だってあっという間におばあさんだ」

「相変わらず酷い事を仰います」

「本当のことだ。君もいつまでも若くはないのだから、男を手玉にするのはそろそろ卒業したほうがいい。まあ、君に呼び出されてのこのこやってくる僕が言うのもおかしいんだが」

「先生は誤解しています」

「そうかな。噂は色々聞いてる」

看護大学を卒業したといっても、三十五歳の時に看護部長に抜擢されたのは、確かにかなり異例だった。噂されても仕方ないだろう。しかし、もう五年も前の話だ。淑子は今年四十の大台を超える。

「先生がゴシップをお好きなんだとは知りませんでした」

「人間だれしもそうさ」 恭介は肩をすくめた。

「まだ君が主任の頃だったかな、当時内科部長だった本宮先生の奥さんがナースステーションに怒鳴り込んで来たことがあったね。僕もその場に偶然居合わせた。あれは、なかなか凄まじい光景だった」

淑子もその時のことは当然覚えている。標準以上の美しい人だったけど、あんな風では本宮先生もお気の毒ね。淑子は優越感を持って思い出した。

何事がおこったのかと、医者や患者が集まってきて、ちょっとした見ものだったわ。本宮の慌てふためいた様子は、その後しばらくの間、医局で格好の話題になっていたそうだ。

「奥様、何かの誤解です」と静かに答えたけれど、おなかの中ではヒステリックに叫ぶ奥さんがとても愚かに見えた。みっともないことはおよしなさいよ、と言ってやりたい位だったわ。

その後、淑子の立場が悪くなったわけではない。本宮は以前にもまして淑子に親切に接するようになった。彼としても申し訳ないと思ったのだろう。しかし、ナースたちの自分を見る目は確実に変わった。

昔話をしても仕方ない、そろそろ本題に入らなければと思った時、恭介がポケットから携帯電話を取り出した。着信があったらしい。

「ちょっと失礼する」そう言って席を外した。

雪を眺めながら、淑子は思い出していた。

風邪をひいて病院を休んだとき、外科部長の松崎が薔薇の花束を抱えて淑子のマンションまでやってきたことがある。

「先生、こんなことをされては困ります」

「お見舞いの花を届けに来ただけだから」と強引に花束を押し付けて帰って行った。

何て非常識なの、と花束を流しの中に放り出した。私は風邪で休んでいるのに、迷惑だって思わないのかしら。

どこからどう伝わったのか、その話は病院中に広まった。ナースの間での淑子の評判は一段と下がったようだ。自分が嫌われているのは知っていた。淑子の能力と美しさに対するやっかみと軽く受け流していたが、主任という立場を考えるとナースのすべてを敵に回すのはまずい。

あの事件で馬鹿を見たのは自分のほうだと淑子は思う。実際は何もなかったのに、噂だけが先行して評判を落とした。

それにもかかわらず、前の病院長が体調を崩した時、専任のナースとして看護を任されたのは自分の能力を買われたからだと自負している。奥様にも感謝された。そして亡くなるまでも一年間、つきっきりでお世話をした。その結果として三十五歳で看護部長就任になったのだ。噂されているようなことは何もない。

雪は小降りになってきた。コーヒーはすっかり冷めてデミタスカップの底のほうに黒い澱みを作っている。

「待たせてすまなかったね」

恭介の申し訳なさそうな声がする。

本題に入る頃合いだ。淑子はしおらしげな声を出した。

「先生は私のことを憎んでいるんでしょうか？」

恭介は淑子の真意を測りかねるかのように目を細くした。

「また、何を言い出すのかと思えば……」

「桑野先生の件から……」 淑子は組んでいた足を意識的に下ろした。

「君が桑野君と大喧嘩をして、病院から追い出した一件だね」

「追い出したりしません。私にはそんな権限はないです。桑野先生はご自分で辞められたんですから」

「それにしても、君が病院長まで話を持っていかなければ、ああいう結果にはならなかった。確かに君は有能な看護部長だ。だが、あの一件は職務を逸脱しているし、病院長が君の言葉を取り上げた理由は別にあると職員は思っている。桑野君はそんな体質に嫌気がさしたんだよ。彼は僕と同窓だった。有能な人材を失った。だが今更言ってみても仕方ないことだ」

淑子の耳に当時の桑野の言葉が聞こえてきた。

—これは医者領分だ。余計な口出しはやめなさい。君には関係ないことだ。

淑子はプライドを傷つけられた怒りで一杯だった。医者とナースは同等のはず。しかも私は看護部長よ。

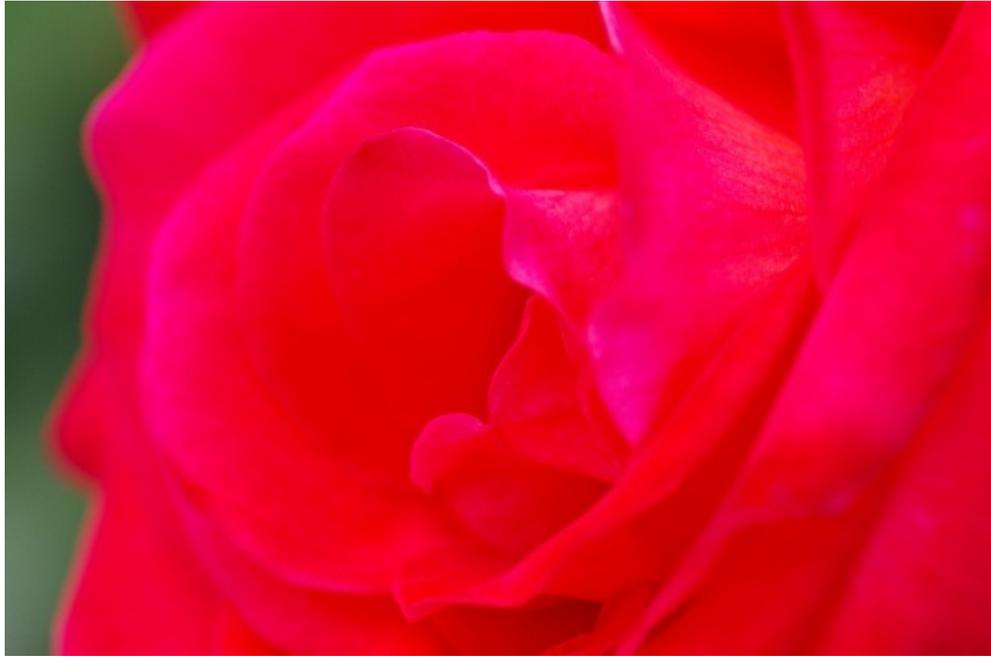
病院長へ訴えたのもその思いがあったからだ。自分の立場を過信していた嫌いも確かにあった。

今、そのつけがきている。なんとかしなければ……。

恭介が自分の呼び出しに応じて姿を現すかどうかに、淑子は賭けていた。来れば脈があるが、来なければ別の手を考えなければならない。

「ええ、あの件については反省しています。若かったんです、あの頃は」

「そうだな、若くて美人でまるで真紅のバラのようだった。ただし、鋭い棘を持ったバラだね。我々男共はさしずめバラに囚われた小さな虫というところか。魅せられて、しかも抜け出せないでいる」



—間抜けな虫たちね。もう顔も思い出せない虫もいる。

「先生にお願いがあるんです」

「僕に？」

「ええ……」

「何だね？」

「私も連れて行ってください」

「連れて行ってとは、どこへ？」

「先生の新しい病院へ」

「君は今の病院で十分優遇されているだろう」

「先生はご存知のはずです、私の気持ちを……。先生と一緒に働きたいんです」

恭介は黙って冷たくなったコーヒーを一口啜った。

「今度の病院では、今までのような訳にはいかないよ」

「覚悟しています」

恭介は無言でしばらくカップを見つめていたが、決心したように真っ直ぐに淑子の顔に眼を向けた。

「二、三日中に連絡する。君のメールアドレスは変わっていないね？」

「ええ、先生が以前よくメールを送ってくださったアドレスと同じです」

一時期、恭介が淑子に関心を持っていたことを思い出させようと、うつむいていた顔を上げて答えた。



帰宅直後に淑子の電話を受けた時、用件を察して即座に恭介は決心した。

病院を辞めた後、大病院に嫌気がさし、田舎に戻って小さな医院を開業した桑野。それはそれでよかったのかもしれないが、地方で埋もれさせて良い人材ではない。

—桑野君、復讐のチャンスだ。彼女をそばにおいて復讐の機会を狙うつもりだ。

それは恭介自身の復讐でもあった。

妻が倒れたあの日、電話を受けたのは淑子だった。会議が終わるまで知らせなかった淑子に、恭介は震えるような怒りを覚えた。

—なぜすぐに知らせなかった？ 会議より妻が大事なのは自明だろう。たとえ助からなかったとしても、少しでもそばにいてやれたのに。

「悪いようにはしない。連絡を待っていてくれ」

恭介は伝票をつかむと立ち上がった。



-fin-